昭和51年7月1日発行　毎月1回1日発行　昭和44年12月10日　第三種郵便物認可

# ニュー茨城

—経済・社会・建

Vol.8／No.7

◇茨城県中小工業の展開方向とその課題(2)

◇高速道路関連流通施設について(2)

講演会　都市環境と建築　神代雄一郎

新地域主義について　田村　明

新連載　経営者に聞く(1)

日東電気(株)社長　阿部吉之助氏

財団法人 常陽産業開発センター

# 新地域主義について

横浜市企画調整局長
田村　明

**大　要**

昭和四十年央頃から、一部の方々が「新地域主義」ということについて提唱をはじめ、昨今ではその議論も一段と熱気を帯びてきている。今回は、早くから独自の見解を主張されている田村明氏を招いて過日行なわれた講演会からその要旨を掲載し、氏の新地域主義論の一端をうかがうものである。

田村氏は、地域とはそれぞれの特徴や色々な生活を備え、それなりに意味をもち更にこの全体がひとつの意味をもつものであるが、残念ながら日本はそういう味がありながら二つの大きな要因から必ずしもそのように進まなかったと説かれる。

すなわち、第一は明治維新であり、ここでは地域農業を欠落させ、人為的に地方を分割することにより大区小区制度を作り、第二には戦後の情報手段の発達という科学技術の上で全体を一色にしてしまう、というような革命が行なわれた。その結果として、地域の特性、独立性が失なわれたのではないか、とする。

それでは、今後どのようなモデルが良いのか。田村氏は、「中央集権のピラミッド型」から、各地域がそれぞれ独立性をもち、それをまとめたところに日本があるような「多数の円が重複的に重なっているモデル＝同心円型」に日本は変わりつつあるし、変わらざるを得ないとする。今や、地域の問題は中央の指示に従うのではなく、自分で解かなければならず、それぞれの地域がそれぞれ考えることがどうしても必要になってきている。その際、情報革命は両刃の剣で、そのどちらを使うかは使い手によるわけであり、また個性の発揮の為には、その条件たる風土や歴史に対する見直しも大切なことである、と主張される。

## 一、地域の味

本日は、新地域主義ということについて、私の考えていることをお話し申し上げたいと思います。

この言葉は若干の方々がおっしゃられております。それに刺激されたというわけではなしに、私は別の意味合いでいっているわけであります。

いきなりこの言葉に入る前に私の経歴を少し申し上げますと、私は東京生れの東京人で

す。しかし典型的な江戸っ子ではない東京人というより都会人の方です。父も母も地方から出てきてそのまま東京に住みついたものですから、私にとっては帰るべきいなかはありません。都会に生まれて都会しか知らない人間、ほとんど地縁的なものがない人間です。

しかし私でも年が経つと何となく不安になってまいります。このまま東京で学校を終えてずっと東京に住まいをもち、一回も東京を出ないことになるんではないか。このままでは自分が片輪になりそうだという感じがいたしました。どこか東京以外のところに住んでみたいと思いました。昔は旧制高等学校という制度があって、これはどこへでも行ける便利な制度でした。そこで、東京の高等学校に入るのは意味がないと思いまして、静岡へまいり、そこで三年ほど過ごしたわけです。その経験は私にとって非常にいい思い出です。

このように、条件さえ良ければ弘前でも旅順でも自由に出ていき、そして大学もどこへ行くかわからない。そういうように学校の中で非常に動きがあった感じがいたします。その点今の人は、高校が東京、横浜であれば大学も東京か横浜にせざるを得ない。これは非常にかわいそうな気がいたします。

私はいろんな経験が多ければ多いほどより豊かな、全体的にものがわかる人になると思います。天才が生まれる条件はいくつかあるそうですが、第一に、父と母が全然違うところに生まれた夫婦であること。第二はその人が成長するまでの間に三度以上転居すること、第三はいろいろな所に触れ合うということ。つまり、東京と水戸は違いますから、そういう違いの中に身を置く。すると今まで東京にいてわからなかったことも逆に水戸から東京を見ることができる。また東京に住んでみると、東京の良さも悪さもわかるようになる。私自身の経験から申し上げましても、私は全くの東京っ子だったわけですが、静岡に住み大阪に住んで、日本列島をいろいろ別の角度から眺めることができたことは非常に幸せだと思います。

そんなわけで私、その時代から地域の問題については非常に関心があって、その後、都市計画とか地域開発の仕事をやるようになったのですが、やはりその土地土地が特徴をもっており、そこに意味がある。だから何でも東京が中心で全てがその下にあるのではなく、各地でいろいろな生活があり、そこにいろいろな質の違うものがある。この全体が一つの意味をもっているんではないかと思うわけです。

## 二、地域の喪失

ところが残念ながら日本列島全体はそういう味がありながら、必ずしもそのように進んだとは思いません。その原因は大きく二つあると思います。

### ① 明治維新

第一の原因は明治維新です。一八五四年、日米和親条約が締結されたわけですが、あの頃はとにかく全国を一つにまとめなければだめだという声が非常に強くあった。これは幕府側も尊攘側も考え、そして明治維新ができ上ってくる。しかしその中で欠落した要素があったように私は思います。確かに国を統一し、日本を強い国にしなければならないという状況もあったでしょうが、その場合地域の要素をどう考えるかというのが非常に大きく欠落してしまった。要するに真ん中を作ることに非常に忙しかったわけです。何故ならば、中央政府は出来たものの財政的基礎は全くないから、いかにしてお金を集めるかということが一つの目標でした。次に徴兵制をしいて、いかにしてこの徴兵制を全国に行きわたらせるかが目標でした。もちろん私は中央政府をこしらえたことを否定するわけではありません。しかしそれを余りに急ぎすぎて、全ての地域をいかにして従えるかに重点がかかりすぎた。やはり、バランスをもった歩みが必要だったと思います。

明治四年に戸籍法ができます。だいたい近代国家では人間が何人いるかということは、重要な問題です。と同時にこの戸籍法によって大区小区制度を作り、日本列島を区という単位に分けてしまいます。しかしこのときにただ区に分ける、人口を調べる、徴兵をするというだけではなしに、地方とか地域とか部落とかをつぶそうという考えが一つあります。すでに廃藩置県で藩をなくしましたが、藩だけでなく、もっと小さな村や部落にもブルドーザーをかけるようなことをしたわけです。

その後地方に対する新三法ができ、その中でもう一回、村や町が復活してまいります。その方が、全体を統治するには能率的、効率的で都合がいいわけです。従って個々の中の自主性や個性はむしろ消していくいき方です。もちろん日本は西欧諸国とも違いますし、封建時代も非常に長かったので、本当にそれが独立性のある、意味のある存在で、それを前提として近代国家を作っていくのか、そうではなくて末端にある地方、地域にすぎないのか、その方向性を誤ったと私は考えるつナです。

常にかわいそうな気がいたします。

私はいろんな経験が多ければ多いほどより豊かな、全体的にものがわかる人になると思います。天才が生まれる条件はいくつかあるそうですが、第一に、父と母が全然違うところ

藩だけでなく、もっと小さな村や部落にもブルドーザーをかけるようなことをしたわけです。

その後地方に対する新三法ができ、その中でもう一回、村や町が復活してまいります。明治二十二年には市制が施行され、いわゆる市町村ができてくるわけですが、それはもはや昔あった部落ではありません。と同時に西欧社会で市民というものが発生した自治体でもありません。名前が変わっただけで思想としては大区小区の思想です。つまり便宜的にどう分けるかという分割の仕方なのです。しかしそれが余りに官制的なので、若干中庸を得たところで現在の市町村制ができてまいります。

本来、地方とか地域とか村とか町は、全体があってそれを分割してできたはずはないのです。これは日本だけでなくどこの国でも同じですが、いきなり大きなものがあるわけではなく、初めはむしろ小さなものです。小さなものがお互いに設立をして、それがだんだん積み上がって大きくなっていく。地方というのはまさにこういうものではないかと、私は思います。地方が積み上がって全体を作り上げていく。こういうパターンは西欧諸国の中ではたくさん出来上がっているのですが、日本の場合は、非常に残念なことに明治維新のときこういう設立の仕方をしておりません。つまり地方は分割の対象であった。そしてこれはできるだけ画一的に作られました。

う味があったなら少
だとは思いません。その原因は大きく二つあると思います。

① **明治維新**

第一の原因は明治維新です。一八五四年、

その方が、全体を統治するには能率的、効率的で都合がいいわけです。従って個々の中の自主性や個性はむしろ消していくいき方です。もちろん日本は西欧諸国とも違いますし、封建時代も非常に長かったので、本当に自主的に作り上げた都市はほとんどなく、自治の伝統が非常に弱かったことは確かです。

しかし全然無かったわけでもない。例えば江戸の五人組などは、強制的に作られた自治ですが、全く封建的な強制支配ということだけでなしに、同時に適当に自由を与えられていて、部落や村といった半自治的な単位があったのが、日本の江戸時代の姿ではないかと思います。本当の意味での自由都市はなかなか日本では発展しませんでしたけれども、中央集権国家とは違う何かがあった。しかしこれも地方とか地域は余り重視されないまま、全体として突っ走ってしまうわけです。

確かにこれは能率的には非常にいいのですけれども、その結果どういうことになったか。

日本の国も条約を改正し、対外的にも威信を高めなければいけない。そこで富国強兵という政策を集中的にとってまいります。それをやるためには徴兵制を確立することが最も重要な要素です。明治七年に内務省ができ大久保利通がこれに就任し、とにかく近代国家といえば中央集権国家ということ一本で進んでしまいます。この中で一番欠落したのが、地方とか地域をどう考えていくかです。それ

ただ区に分ける、人口を調べる、徴兵をするというだけではなしに、地方とか地域とか部落とかをつぶそうという考えが一つあります。すでに廃藩置県で藩をなくしましたが、

ぞれが独立性のある、意味のある存在で、それを前提として近代国家を作っていくのか、そうではなくて末端にある地方、地域にすぎないのか、その方向性を誤ったと私は考えるわけです。

日本の国自体を、非常に効率のいい機械にはしたが、目的を誤ったために非常に大きな敗戦という憂き目を見てしまうわけです。それより地域、地域がいろいろなものを持っている中でバランスを取りながら行ったほうが、日本の国全体としてはかえって効率がよかったのではないか。つまり今まで式の効率ではない別の次元から見た効率、そういうものを考えても、新地域主義を考える必要があることを第一に申し上げたいわけです。

② **情報手段の発達**

第二に問題なのは、やはり戦後でございます。終戦後色々なことが起きましたが、一番大きなことは情報手段の発達、情報化ではないかと私は考えます。

今や、鉄道、道路、電話、テレビ等において、情報、交通の革命は全く著しいものがあります。それは国民にとって有益なことだったのでしょう。それによって我々は色々な便利さを享受していることは確かなのですが、しかしその結果、どこへ行っても同じになってしまった。情報、交通網はアッという間に日本列島に行き渡り、その結果どこへ行っても同じ情報をもとに同じことを話している。どこへ行っても特別なものは余りないわけで

す。これが、私は戦後三十年の間の一番大きな変化だと思います。

つまり人為的にこういうものをこしらえていったのではなしに、科学技術の進歩が日本列島の中を一変させてしまった。そして一方では地域の特性が非常に失われてしまった。従って人為的には分割による大区小区制度を作り、なおかつ戦後は科学技術の上で全体を一色にしてしまうような一種の革命が行なわれた、と考えるわけです。

ではどのようなモデルを我々は考えるべきなのか。日本列島を考えた場合、いろいろなモデルがあります。中央集権のピラミッド型も一つのモデルですが、果してこれでいいのかというと、どうも余りよくなくなってきている。かつては物事が単純なときには、中央から「ひとつ、皆やって下さい」ということで済んだかもしれません。しかし今はそうもいきません。中央自体が非常に複雑になっていて、ここで意思をひとつ決定するだけでも大変です。いろいろなものを決めかねている。地域、地域は一色になったみたいですが、しかしいざやろうとすればいろんな意見がある。従って誰がどう責任をもって、どこでどう決めるのかというパターンが何となく失われております。

昔ですと情報は中央しか知らないから、中央がいうことに地方はそのまま従った。ところが今は特に情報網が発達したために、全国が一色になってしまったわけです。こうなったがために、中央支配はかえってやりにくいわけです。ですから情報革命は全国を一色に塗りつぶしてしまうのは容易ですが、統治手段としてはむしろ非常に具合が悪い。また中央のほうも、どういう価値基準でものを決めていくのかといったものの決め方自体が非常に複雑になってきて、自信がなくなってきてしまう。昔は、三角的なピラミッド型は非常に能率的だといわれていたのですが、必ずしも能率的ではないし、むしろそういうことができなくなるわけです。さらに戦後はもうひとつ、民主主義という問題が出てまいりまして、行動が変ってきたことは確かです。

## 三、地域で自主的に考える
### ――新地域主義――

それなら中央的な支配を強めればいいんだといわれるかもしれませんが、理屈でいくらいったところで、そうなる客観的情況にはまずありません。ではどうすればいいのか。

私はその意味からも新地域主義ということをいっているわけです。地域、地域で自主的にものを考えるということでいいではないか。もちろん全体の中でどうしても必要なものは、どこか一カ所で問題を整理することは必要でしょう。つまり同心円型という形ではないかと思います。そのような構造にしなければ、ある種の能率という意味でも出来なくなっているのではないか、という感じがいたします。

つまり大久保利通流の分割統治型、ピラミッド型は明治からある種の力を発揮したけれども、ある時点からは戦争に突っ走るための効率主義であって、確かに細かいところでは効率的であったけれども、全体として誤ってしまった。そういう効率主義はやめようじゃないか、ということです。

しかし第二に情報革命が起こってきて、その中でもう一度こういうことをやろうとしても結局、何でもわかりすぎてうまくいかない。

ところが中央の情報は全国に行きますが、地域、地域の情報は余り伝わりません。水戸のこと、茨城のことは余りよくわからない。昔はごく少数のエリートが中央にいて、あとはこれがいう通りをやっていた方が間違いない、ということだった。ところが今は、高等教育を受ける人が非常に多くなって、どこにもたくさんいる。中央でなければ地域のことがわからないわけじゃありませんし、むしろ地域にいる人の方がより自分達のことをわかっている。それなら、その人達が自分達の地域のことを考えた方がずっといいことが行なわれる、ということになります。

更に、情報革命あるいは交通革命で大きな鉄道や道路が入ってくると、全く情況が一変してまいります。この一変した中でいろいろな問題が起きてきます。しかも地域の問題というのは昔に比べると、いろいろな大きな変化があっただけに何層倍か起きております。その何層倍か起きている問題はお互いに関係があります。例えば工場があることと大気汚染ということは相互的な関係ですから、全体をひっくるめてものを考えなきゃいかん。そ

域の問題は地域が自らやらなければどうにもならない情況が、戦後生まれてきたと思います。その形は従来のピラミッド型構造ではなくて、各地域がそれぞれ独立性をもってお

と、私はどうもよくならないと思います。やはり水戸と静岡と横浜とはそれぞれ違いますから、一色になりっこない。もしそんなことがあったら非常に味気ないです。

がある。従って誰がどう責任をもって、どこでどう決めるのかというパターンが何となく失われております。

昔ですと情報は中央しか知らないから、中央がいうことに地方はそのまま従った。ところが今は特に情報網が発達したために、全国が一色になってしまったわけです。こうなっか。もちろん全体の中でどうしても必要なものは、どこか一カ所で問題を整理することは必要でしょう。つまり同心円型という形ではないかと思います。そのような構造にしなければ、ある種の能率という意味でも出来なくなっているのではないか、という感じがいたします。

その何層倍か起きている問題はお互いに関係があります。例えば工場があることと大気汚染ということは相互的な関係ですから、全体をひっくるめてものを考えなきゃいかん。その意味で、システムが非常に複雑になってきます。こうなると、中央で総合的にこれを解くことはどうしても不可能になってくる。それぞれの地域で考えてもらうしかない、というように必然的になってまいります。世の中が非常に複雑になってきた中で、地域というものがもう一度見直されなければなりません。

今までですと、各地域、地域の問題は中央の指示に従ってやればそれでよかった。しかし今やそうはいかなくなって、自分のところの問題は自分で解かなくてはいけないし、また解く能力を備えてきた。もっといえば中央はこの能力を消失しているわけです。もちろん全国的なことを考えるのは中央ですが、茨城のことを考えるのはもう中央では無理です。水戸のことと静岡のことを同時に考えて、それぞれに最良の答など出てくるはずはないのです。その意味でも、それぞれの地域がそれぞれのことを考えるということが、どうしても必要になってきます。これを私は「新地域主義」という言葉でいっているわけです。

これは何も権力に反抗するわけでなく、実際にそうしなければ自分達の地域は守れないし、作れない。あらゆる意味からいって、地域の問題は地域が自らやらなければどうにもならない情況が、戦後生まれてきたと思います。その形は従来のピラミッド型構造ではなくて、各地域がそれぞれ独立性をもっており、それをまとめたところに日本という国が出来てくる。つまり多数の円が重複的に重なっているようなモデルに日本は変わりつつあるし、また変わらざるを得ないのではないかと思います。これが私がお話したい「新地域主義」でございます。

## 四、情報革命は両刃の剣

しかし同時に、必ずしもよくない情勢もございます。今の情報革命はまさに両刃の剣で、一面では中央支配でなくそれぞれの地域がやらなければいけないという情況に追い込んできた原因でもあります。しかし同時に、全部を一色にしてその個性を押しつぶしてしまう。これがおかしな方へ行けば全く個性のない、つまらない味気のないものになってしまいます。しかし別の意味では、それぞれの地域でものを考えながら個性のある町や県を作っていく可能性が生まれていると思います。そのどちらを使っていくのかは、使い手によるわけです。住んでいる方々が一体この道具をどういうふうに使うか。これが今後の地域に非常に重要な問題ではないかと思います。

その第一は、やはり自主的にこの問題にぶつかっていくことです。全部が一色になってそれで本当に日本列島がよくなるのかというわれる、ということになります。

更に、情報革命あるいは交通革命で大きな鉄道や道路が入ってくると、全く情況が一変してまいります。この一変した中でいろいろな問題が起きてきます。しかも地域の問題というのは昔に比べると、いろいろな大きな変化があっただけに何層倍か起きております。

と、私はどうもよくならないと思います。やはり水戸と静岡と横浜とはそれぞれ違いますから、一色になりっこない。もしそんなことがあったら非常に味気ないです。

人間は全く原始的な時代は同じようなことしかしなかった。ところが人間は文化というものを発展させてきた。それぞれが違う住み方、違う遊び方、違うものの感じ方……いろいろな違いが現われてきたことが、私は文化ではないかと思います。文化というのはやはり、人間が人間であること、いかによりよい人間であるかということだろうと思います。

そうしますと、新地域主義の中身としては、地域がそれぞれ自主的に自分達の文化を創り出す文化創造力が必要になってきます。また新地域主義の中でこそ文化創造力が生まれてくるのではないかと私は思います。

## 五、個性的な地域への試み

### ① 水戸市六番池公営住宅

きょうの午前中、水戸市六番池の公営住宅を拝見させていただきました。わずか九〇戸程の小さな団地ですが、普通公営住宅といえばありきたりで、パッと箱を作ってそこに詰め込んでしまう。しかし同じお金をかけるのでも、人間の知恵、工夫をこらせば何か出来るはずだという試みがされていて、公営住宅でもこういうことができるのかと、つくづく感心致しました。

もちろん六番池が最高ではないかもしれませんが、それはそれぞれの知恵と力を競えば

いい。しかしそういうものが何故できるかというと、茨城県という単位だからです。かえって、日本住宅公団のような全国的な単位で何か新しいことを考えようとしても、なかなかできない。昔は、全国的にやるからこそ新しいことが次々にできるというパターンだったのですが、どうも現在は住宅公団の中では新しい発想はまず出てきそうもない。何故そうなのか考えますと、一つは余りに沢山やりすぎるからです。その点、六番池はわりと小さな単位だったことが、まずできた原因ではないかと思います。〝大きいことはいいことだ〟から〝Small is beautiful〟になってきたのではないか。この住宅を見まして、私はつくづくそういう感じがしたわけです。

（茨城県営六番池団地）

住宅公団にも能力のある方は沢山おられます。しかしながら、力を発揮しないでおしまいになってしまう。ですから中央というところはどうも、キメの細かい個性的なものをやる能力は薄れてしまったのではないかと思います。

六番池の公営住宅ができるのも、一つの地域という単位だからです。私はこういうものが随所にあり得ると思いますけれども、そこではまずやってみることです。

### ② 横浜都心プロムナード

例えば私、横浜で都心プロムナードというものを作ってみました。横浜は港がありますから、みな港へ港へと行きますが、車の標識はあっても人間の歩く標識は余りないのです。そこで何かそういうものを考えてみようということになりました。しかしただの標識では面白くありませんから、単なる案内ではなしに、歩くということを見直して、私は絵を描いたタイルを歩道に五〇㍍位おきに埋め込みまして、船やカモメを伝っていくと港へ出るようにしました。とにかく歩道を楽しく歩けるように、しかも歩くということをもう少し考えてもらってもいいんじゃないか。と同時に港へ行くという本来的な役割も果たす、こういうことでやってみたわけです。

これは一つのささやかな例ですが、これを全国でやろうとしてもできるはずはない。ある単位だと、やろうと思えばいろいろな試みができます。私はこれを単に地域エゴでいっているのではなく、個性的な、文化的な試みを各地域、地域がするチャンスが生まれてきたのではないかということなのです。

## 六、個性的文化の発展

昔は大きくなければ出来ないことは沢山ありました。今後はおそらく、小さくなければ出来ない仕事が沢山できてくるだろうと思います。ベースの上に立って創造的な試み、個性的な試みができるのは、小集団の場合もありましょうが、私はそれぞれの地域が一番可能性があると思います。地域にはそこに長年住んでいる人がおり、独特の風土があるわけです。その風土の中に長くいれば何か考えられるものがあります。

よくも悪くも全国は情報的には同じになってしまった。確かにベースは必要ですから、その意味では情報が非常に流れ、教育水準が非常に上がっているということは大変結構なことだと思います。しかし教育が普遍化したから何かが出てくるというものでなく、逆に創造力はなくなってしまう。実はよくわかっていないのだがわかったような気になって、それ以上は新しいものをつけ加えない。変に教育を受け情報が入っている人の方が管理社会に組み込まれてしまって、自分で発想し、[illegible]

[illegible]くこの風土と歴史というものがその地域、地域の個性を彩っているはずです。そういう中で最も個性的なものが出てくるはずです。つまり茨城なら茨城だけでしか出てこないものがあるはずです。

[illegible]う意味の新しい文化が必要だということです。

先ほど、より多くの多様性をもっていることが文化だと申しましたが、同じになっては[illegible]ません。本当の文化を

て　日本住宅公団の
何か新しいことを考えようとしても、なかなかできない。昔は、全国的にやるからこそ新しいことが次々にできるというパターンだったのですが、どうも現在は住宅公団の中では新しい発想はまず出てきそうもない。何故そうなのか考えますと、一つは余りに沢山やりてしまって、その意味では情報が非常に流れ、教育水準が非常に上がっているということは大変結構なことだと思います。しかし教育が普遍化したから何かが出てくるというものでなく、逆に創造力はなくなってしまう。実はよくわかっていないのだがわかったような気になって、それ以上は新しいものをつけ加えない。変に教育を受け情報が入っている人の方が管理社会に組み込まれてしまって、自分で発想し、自分で努力して作っていくことはなくなってきています。しかしそういう中でもう一度、自ら作っていくことが問われている時代だと思います。日本列島全体が文化性をもち得るにはそれしかないと思います。

国際社会においては日本は何となく孤児になっているような気がしますが、日本列島というのは資源の問題からいっても食糧の問題からいっても全くの孤児ではもうおれません。外交というのは非常に難しい問題ですが、今まではどうも、分割主義式発想で外国とのつき合いをしてきたのではないか、と私は感じます。もちろん実務的に食糧を入れることも必要ですし、資源を買うことも必要なのですが、それと同時に文化性という意味でも外国とおつき合いしなければいけないのではないか。この文化性というのは、一つ一つのいろいろな単位の人がいろいろな意味の文化性を持っていることだと思います。

この場合の文化というのは、大ざっぱな日本文化ではありません。地域主義の中で水戸は水戸のものがある。横浜は横浜のものがある。なるほど日本という国は、いろいろな角度からいろいろな人と知り合えて、皆いろいろなことを考え、いろいろな創造力を発揮しているんだな、ということを感じさせるというみようということになりました。しかしたたの標識では面白くありませんから、単なる案内ではなしに、歩くということを見直して、私は絵を描いたタイルを歩道に五〇㍍位おきに埋め込みまして、船やカモメを伝っていくと港へ出るようにしました。とにかく歩道をこの風土と歴史というものがその地域、地域の個性を彩っているはずです。そういう中で最も個性的なものが出てくるはずです。つまり茨城なら茨城だけでしか出てこないものがあるはずです。

我々は明治以後一〇〇年、そして終戦後三〇年いろいろなことをやってきたわけで、共通のベースの方はある程度までいっていると思います。今や大まかな議論ばかりしていても仕様のない時代にきており、もっとそれぞれが個性を持つことが必要です。そういう個性的な文化が発展できるのは、やはり新しい地域の中でしかないだろうと思います。

江戸時代もひとつの地域主義だったのですが、結構個性的なことを各藩はやっております。水戸藩などはその中でもユニークな藩です。しかしあの時代は、いわば閉じた地域主義でしょう。しかし今はもう少し開いている状態だと思います。そういう状態の中で最も個性的な分子が出てくる可能性が現在あるしまたその必要性がある。これが日本列島全体を最もよく生かすしかけではないか。そしてそれが国際社会でおつき合いをしていくベースにもなるだろう。またそこに生きている人々が喜びをもって、自信をもってやっていくことにも繋がるのではないかと思うわけです。

（本稿は昭和五十一年六月三日常陽銀行本店会議室で開催いたしました当センター主催のまちづくり講演会の要旨です。文責・在事務局）

という意味の新しい文化が必要だということです。

先ほど、より多くの多様性をもっていることが文化だと申しましたが、同じになってはちっとも文化ではありません。本当の文化を作っていく為にはそれぞれの地域がそれぞれの意味をもって、それぞれの創造力を持たなければなりません。と同時にそれぞれが個性をもつということは、自分だけがよければいいという意味ではありません。むしろ一色に塗り込められている方が、お互い隣りに対して鈍感です。また一つの単位でものを考えるのであれば、同時に他人のことがわかってくるはずです。

ところが情報化社会の中では皆が同じになってしまって、個性的でありにくくなっております、ではどこで個性的になれるかというと、風土と歴史でしょう。特に日本みたいにそれぞれの地域が個性ある風土をもっている国はありません。こんな小さな所のくせに風土条件がいろいろ違う国は、非常に珍しいケースでしょう。ですからベースとしての共通の情報の上に独自のものを築く可能性は日本が一番あるのではないかと思います。

もう一つ、個性をつくる条件は、おそらく歴史でしょう。そこに親父さんがどうかしてた、お爺さんがどうかしてたというのは、やっぱり歴史の中でそれぞれ培われたものでしょう。ですから、風土が地理的、平面的なものとすれば、歴史は時間的なもので、おそら

# 書類送付のご案内

2023年10月6日

NPO法人田村明記念・まちづくり研究会
田口　俊夫　様

株式会社常陽産業研究所

いつも大変お世話になっております。
下記の書類をご送付申し上げますので、ご査収の上よろしくお取計らい下さいますようお願いいたします。

同封書類

○常陽産業開発センター　機関誌「ニュー茨城」1976年7月号
まちづくり講演会録　「新地域主義について」（写）　1部

※弊社保管分が綴じ込み冊子となっているため、写が不鮮明な部分があることをご了承いただきたく存じます。

常陽産業研究所

＜連絡先＞
経営企画部　大和田
029-233-6731

株式会社 常陽産業研究所
〒310-0011 茨城県水戸市三の丸1丁目5番18号
Tel:029-233-6731 Fax:029-233-6724

103 田村 1976.7